

「心の中の悪の要素は雑草の如し」と教えた明治時代の小学生向け教科書

森田 弘彦

「雑草」の言葉を使って人間の善悪を表現することがしばしばあり、なかでも「雑草魂」は地道な努力を讃える「善」の意味で、スポーツ分野などで使われる。「悪」の方では、有罪判決を受けた某芸能人がブログで「・・・(良心の)空き地には徐々に雑草が生えてくるようになってきます。この雑草が悪の根源なのです・・・」と綴ったようで、現在でもこのように使われるのは誠に心外である。雑草を人の良心を侵す悪者に例えることは、明治時代のはじめから教科書を通して小学生に教え込まれていた。

江戸時代が終わり、1868年から明治の世の中になり、同5(1872)年には新政府が「学制」を布き、子供たちはそれまでの寺子屋から学校に通うことになった。翌年、文部省が、小学校用の国語の教科書「小學讀本 卷一～卷四」をアメリカの教育書を基に編纂して出版した。「多くの府県の教則で読み物の教科書として示されたこともあり、各地で翻刻され、明治10年代まで幅広く使用された教科書です(国立教育政策研究所 教育図書館 HP)」とのことで、教育史関係のWebで元版などの情報を入手できるが、筆者の手元には「縣で翻刻された版」である、「第一(卷之一):福岡縣筑前國 明治17年」、「卷二:山梨縣 刻年不明」と「卷第三:愛知縣名古屋 明治18年、愛知縣三河國 刻年不明」がある(図-1)。

卷一と卷二では、子供たちの行動や大人たちの働く場面などの挿絵を素材に、「これは○○なり、汝らは知れるや?」と問いかけながら、「学ぶこと」の重要性とその手順が説かれる。つまり、「卷一」では、世界の人類が5つの人種からなることを述べ、次いで「人に、賢きものと愚なるものと阿

るハ、多く學ぶと學ばざるとに、由りてなり、(中略)幼稚のときより、能く學びて賢きものとなり、必無用の人と、なることなかれ」と続く。もちろん文章は日本風に変えられているが、挿絵の方は洋風のままと日本風のもの混在する。「卷三」では、イネを筆頭に、農作物、花き、樹木などの植物と、昆虫、魚、鳥類、ほ乳類などの動物が記述されていて、国語というよりは理科・生物の教科書を思わせる。実物が筆者の手元にないため、「卷四」をWebのデジタルライブラリーでみると、日本、中国、欧米などの勤勉・忠孝に関する説話が収録されているので、4冊目は修身・倫理の教科書といえる。

「卷二」の「第五回」には、「悪念、悪業は、(心の花園の)雑草の如く」の記述がある。

今、花園に、善き種を蒔きて、これを、生長せしめ、よき植物となし、奇麗なる花を、咲かしめんと欲す、もし、園中に雑草を多く、生せしむるときは、蒔きたる植物の種を害して、生せしめざるゆゑに、雑草を盡く抜き取るへし、

(中略)

悪念、悪業は、心に、蒔きたる、よき種を害するものにて、實に、花園に、蒔きたる、植物の種を、害する雑草の如し、個様なる雑草は、勉めて、抜き去るべし、

(中略)

此圖【図-2】に、画ける人は何を為すと思ふや、○これは、花園の雑草を、抜き去るなり、



図-1 明治維新後の小学校国語用教科書「小學讀本」のうち、各地で翻刻された巻一から巻三の巻頭や表見返し(筆者所蔵)



図-2 「小學讀本 卷二」の、「雑草のような悪念、悪行を抜き去れ」との記事に使われた「花園の雑草を抜き去る人」の挿絵

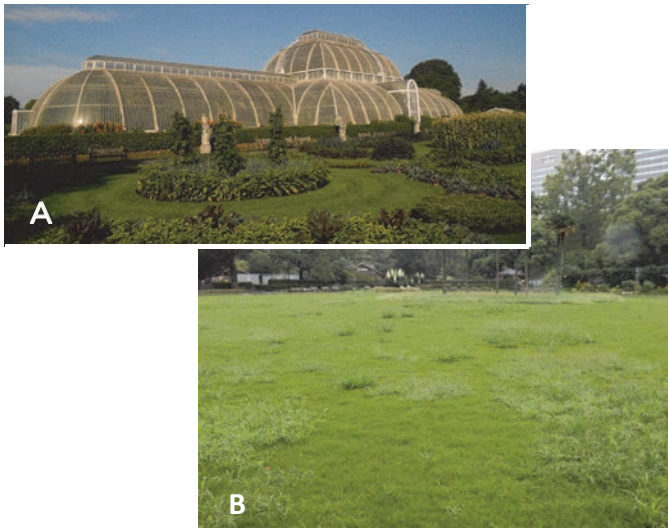


図-3 庭園や花園での雑草の管理 (A：イギリス、王立Kew 植物園 パーム・ハウスとその周囲, B：東京都千代田区日比谷公園の芝生)

今、口に言ふ所と、行ふ事と、違ひたる小児を、譬へて、汝に、教ふべし、それ言多くして、事、少き小児は、雑草の、満ちたる、花園の如し

地はもと、よきもの、なれども、善き種を、蒔かざればよき、植物を、生し、美しき、花を開くことなし、又芽の、出たるときは、能く培養せざれば、生長すること能はず 雑草はこれに反して、種を蒔かざれども、自ら、生長してこれを抜き去らざれば、大に蔓りて、善き植物を害し終にこれを枯らし盡すものなり

人の心も、もと、善きものなれども、善き教へを、聞いて、これに従はざれば、善き人と成り難し、然れども、悪念、悪業は、雑草の如く、甚だ生し易し、もし此れを抜き去ることを、怠りて、増長せしむるときは、良き心を害して、終に、これを枯らし、盡すものなり

汝等、善き人と、ならんと欲せば、此人の、雑草を、抜き去る如く、勉めて、悪念を抜き去るべし

植物の豊富な庭園などをみる機会もあったが、確かに、実体の庭園や花園には雑草のない方が好ましい(図-3)。

Web 情報をみると、明治 12 (1879) 年から農・商の子弟の教育が強調され、小学生向けの農業教科書が作成されるようになったという。大阪府土族の松本英忠氏による「小學農家讀本 1879 (図-4)」もその一つで、「卷之二：第二種藝」の末尾には、「怠け者は雑草にも劣る」と説く部分がある。

夫れ、同じ植物にても、薬材となる有り、毒草となる有り、人も、亦、斯くの如く、善悪良否の別阿れ共、彼の植物等の如き、無霊の者に阿らされハ、己を克免、罷勉して、学問に、従事すれハ、此雑草の

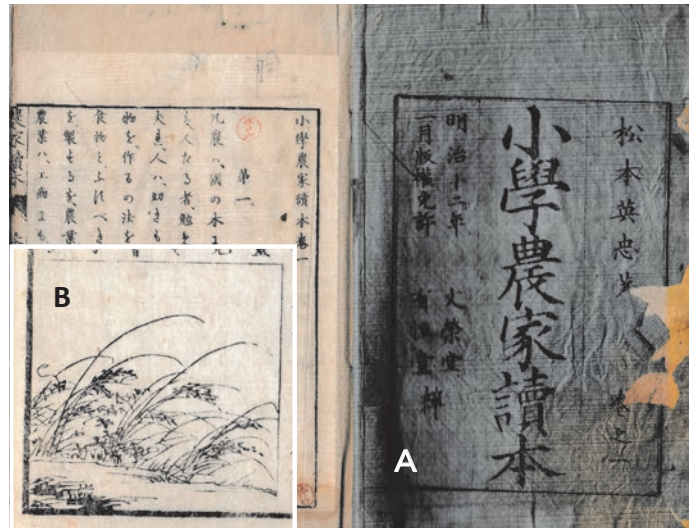


図-4 「怠け者は雑草にも劣る」と教えた、教科書「小學農家讀本 (1880)」の表見返し (A) と雑草を示すと思われる挿絵 (B)

如く、同社会を、妨害するに、至らざる可し 然るに、また、身を脩むることを、知らず、只、酒色に耽り、職業を怠り、一家の貧困を招くのみならず、遂に、他人にまで、迷惑せしむる者有り、是らハ、彼の雑草にも劣れる者ならずや、

なお、上記文章の前には次のように雑草の名称がでてくる。

・茲に、列する所の、八種なる雑草ハ、同じ植物なれども、大に、他の植物を害すれハ、田圃に、生育せし免ざるべし、其八種を「半夏」「剪刀肢」、「カ・ミチシハリ」、又、「ニホヒクサ」、「半辺蓮」、「ヒルムシロ」、澤瀉、燈心草、莞とす 前の四種ハ、圃に生し、後の四種ハ、田に生して、稲を害ふ、

「八種」と言いながら 9 つの名前があるものの、「畑雑草：カラスビシャク、イワニガナやオオヂシバリ、チドメグサ (= ニホヒグサ?)、ミゾカクシ 水田雑草：ヒルムシロ、オモダカ、クログワイ? フトイ」であろう。8 種の選定基準を書いていただきたかった。

「酒色に耽り、職業を怠り、一家の貧困を招く (者は雑草にも劣る)」とは、小学生よりは親に説くべきと思うが、それはさておき、当時の小学生はこんなに多くの漢字の混じった文章を読みこなせたのだろうか。さすがにその問題もあったようで、漢字の読みと意味を集めた「小學農家讀本 字引 (澁谷章平編輯・松本英忠訂正 1880)」で補われたようだ。参考書の走りといえよう。

実体としての雑草は引き続き主に防除の対象であるが、人のココロの中では「善」の役割を伸ばして行って欲しい。